

2007 年秋学期レポート

第 2 期生 谷口 恵美

【はじめに】

新年明けましておめでとうございます。旧年中は暖かい応援を頂きありがとうございました。今年も何卒よろしくお祈りします。今年はみなさんにとって素晴らしい年となりますように。

ギャロデット大学に入学してから約 1 年半経ち、留学生活もあと半年を切ることになる。本当に年月が経つのは早いものであり、1 年半位アメリカで生活したという実感が未だに湧かないものである。

今学期から International Internship Program(IIP)学生としてギャロデット大学の講義を受講し始めた。今まで English Language Institution(ELI)で 1 年間過ごし、ELI の先生方はご丁寧に ASL を表現してくれ、初めて ASL を学んだ初心者である私たちにとって勉強しやすい環境であった。しかし、今学期から本格的にアメリカ人学生と共に受講し、それらの講義は迅速に進んだために様々な困難に直面させられた時期でもあった。しかし、アメリカ人学生と討論するという機会は ELI には無かったので、得たものも結構大きかった。

【IIP】

去年にギャロデット大学に留学してから 1 年間 ELI(English Language Institution)という英語学校で英語と ASL そしてアメリカ文化を学んできたが、今学期から IIP(International Internship Program)学生として初めてギャロデット大学と大学院の講義を受講した。IIP 学生の特徴は、自分で自由に講義を選択することができ、少なくとも本学生として扱ってくれるということである。今学期に取った講義は以下の通りである。

<今学期の受講講義>

“Intercultural communication” 異文化におけるコミュニケーションの講義。

“Deaf culture” ろう文化に関する講義。

“ASL/English bilingual Education 2” サマークラスで受講した講義の続きで、バイリンガルろう教育の応用クラス。

“English 102” 英語の講義で特に reading に重点を置いている。

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
11:00- 11:30	Intercultural Communication	Deaf Culture	Intercultural Communication	Deaf Culture	Intercultural Communication
11:30- 12:00					
12:00- 12:30					
12:30- 1:00					
1:00- 1:30	English 102	ASL/ ENGLISH Bilingual Education2	English 102		English 102
1:30- 2:00					
2:00- 2:30					
2:30- 3:00					
3:00- 3:30					
3:30- 4:00					

これらは私にとって考えさせられる非常に素晴らしい講義だったが、その中で”ASL/English bilingual Education2”という大学院の講義が私の目標や疑問などに最も刺激を与えたものとなり、当初期待していた以上に大変意義のある講義だった。子どもを持つ院生、健常者の院生、以前に教師として働いた経験のある院生などという多様な経験を持つ7人の受講生が集まり、少人数クラスだったおかげでそれぞれの立場の違う受講生たちとの間で意見交換や討論という良い機会に恵まれた。その講義から学んだ3つのことを挙げておきたい。

1つ目は、英語だけの環境で講義を進めさせられたという経験から ASL を言語だと認めてこそ本当のバイリンガルろう教育を学ぶことができると身に染みて知ったことである。ある日、クラスメイトと私は ASL が使えない為にどうやってコミュニケーションを取ろうかということに戸惑いながらも先生は着々と講義を進めていった。講義終了後、私たちはやっと ASL が使える!! という解放感に包まれた。講義中は英語だけであり、

コミュニケーションの限界を感じピリピリした雰囲気が漂ったが、終了後はコミュニケーションの幅が広がり私たち受講生はいつもの笑顔に戻った。私はその講義を通して、ASL は英語と同様に立派な言語であり、私たちろう者の言語なのだと改めて確信することが出来た。担当は、ASL の必要さを知ってもらいたかったらしく、ASL はろう者にとって本当の言語であると主張した。バイリンガルろう教育を学ぶ以上、手話は日本語や英語などあらゆる言語と同様ちゃんとした言語であると心底受け入れなければならない。それはバイリンガルろう教育にもつながる大切な問題だと思う。

2つ目は、文章能力に問題のあるろう者がいる原因はろう者に適した環境が整っていないからだということである。これまで『ろう者は耳が聞こえないという原因により情報の範囲が狭まれ、言語の習得が健聴者と比して遅れてしまう』と考えていた。あるクラスメイトが『もし私たちの耳が聞こえたら高度な単語も知っていたら』と先生に言った所から『なぜ、ろう者の多くは英語の文法の間違が多いのか』という議論が始まり、それに対し先生は『文法の間違いは耳のせいではなくろう者に適した環境が整っていないからだ』と答えた。もし音が存在しない地球だったら、視覚を頼りにするろう者は健聴者と同じ段階で言語を習得することができる。それかもしくは健聴者以上ということもありうる。それが私にとって非常に興味深いテーマとなり、考えさせられた議論もあった。

3つ目は、ろう者としてのアイデンティティを育むバイリンガルろう教育を提供する必要があると学んだことである。スウェーデンやデンマークなど北欧ではバイリンガルろう教育の先進国でもあり、それらの国の法律の下により聾学校や家庭内でもバイリンガルろう教育が進められている。実際、去年3月に北欧教育視察をしてきたが、今まで日本手話に興味のなかった私が 180 度変わったくらい刺激の多かった旅行だった。その反面、人工内耳を装着している子どもが年々と増加してきている。その理由をはっきりとは見出せないが、北欧のバイリンガルろう教育は聴覚障害者と健聴者の共存をめざすことを基本としているため、それが返って聴覚障害者と健聴者の区別がつかなくなり、ろうとは何かを考える機会を見失っているろう者が増加してきてしまったということも考えられる。共存も大事だが、それ以前にろう者としてのアイデンティティを育むバイリンガルろう教育も必要だということも考慮していかないとはいかない。

学んだ内容も去ることながら、多くのことを学ばされた担当そしてクラスメイトたちに感謝したい。

【ELISO】

すでに ELI を卒業しているが、約 60 人以上に渡る留学生たちとの交流も広げていき

いと思い、今後も ELISO をサポートしていこうということでアルゼンチン出身の学生と共に企画係として活動している。以前の ELISO は「英語を学ぶ初心者、または国際留学生」という偏見もありギャロデット大学から疎遠されてきたが、ELISO は発展していき更にメンバーも増加してきており、最近注目される存在となってきた。今学期の企画はゴーストハウス、ハローウィーン、バイバイパーティーなどで特にハローウィーンは皆が楽しめたという感想を頂いて嬉しく思った。来学期は日帰りスキーを企画中である。



(ハローウィーンパーティーで仮装コンテストを設け、私たち企画担当が審査)



(帰国予定の4人の国際留学生を見送ったバイバイパーティー)

【生活面】

2007年の4月にギャロデット大学から30分ほど離れた街にあるアパートに引っ越しし、チリ、コロンビア、南アフリカ出身そして私を含めて日本出身2人のルームメイト5名で新生活がスタートして半年以上になる。それぞれの国の料理を味わえるという機会があり、予想以上に楽しく過ごすことができた。また、私たちのアパートはパーティーを開催するのに程よい広さだったため、週末にはそれぞれのルームメイトの友人たちが訪問して来たりした。上のバイバイパーティーの写真も私たちのアパートで催されたものである。

【最後に / 抱負】

先述した通り、私の2年間の留学生活が残り半年へと迫ってきている。最後の学期には教育実習があり、その期間が約4ヶ月で更に講義も4コマ受講する予定なので多忙な生活を送ることになるだろう。来学期に受講する講義名や内容を1月の生活記録に記載する予定としている。来学期で最後となるが、人生の記憶に刻まれ、そして未来へと残せるように待ち抱えている教育実習に力を注ぐだけでなく、お別れとなる友人たちとの交流もより深めて良い思い出となれるようにしていきたいと思っている。